

「第二十七回庭野平和賞」贈呈式 総裁ご挨拶

本日は、「第二十七回庭野平和賞」の贈呈式にあたり、(主
なご来賓の名前を挿入)をはじめ、多くのご来賓のご臨席を
賜り、あつく御礼申し上げます。

今年度の庭野平和賞を、インドの「自営女性労働者協会(S
EWAIIセワ)」の創始者であられるエラ・ラメシユ・バット
女史にお贈りできますことは、当財団にとりまして大変光栄
なことであります。

皆さまのお手元にあるパンフレットにも一部紹介されてお
りますが、バット女史は、インド政府の上院議員、政策立案
委員会メンバーなど、さまざまな要職を歴任され、現在も多
くの国際機関で重要な役割を担っておられます。また「ラモ
ン・マグサイサイ賞」をはじめ、数え切れないほどの賞を受
けられ、大学の名誉学位、ご著書も数多くございます。世界
で最も尊敬されている女性のお一人といっても過言ではあり
ません。

バット女史は、私よりも四歳年上のお姉さんですが、その
ご活躍ぶりは、年齢を全く感じさせません。ほぼ同年代の者
として、大変勇気づけられる思いが致します。

ご多用の中、こうして東京までおいでくださったことに、
改めて深く感謝申し上げます。

先ほど、ご紹介がありましたように、バット女史は、イン
ドで最も貧しく、抑圧されている女性労働者の生活改善に生
涯を捧げておられます。活動の形態は多岐にわたりますが、

そこには、共通するいくつかの特長を見出すことができます。

第一には、「SEWA（セワ）」の活動が、マハトマ・ガンディーの精神を基盤として、推進されていることでもあります。その精神とは、「非暴力」、そして「全ての宗教を尊重すること」「真実を語ること」、さらには「全ての人を愛し、尊敬すること」などが中心であると伺っています。

私は、仏教徒ですが、こうしたガンディーの精神に、深く共感するものであります。

仏教の開祖である釈尊は、誕生してすぐ七歩歩まれ、右手で天を指し、左手で地を指して、「天上天下唯我独尊」といわれたと伝えられています。「天上天下唯我独尊」を、そのまま読み下せば、「天にも地にもただわれ独り尊し」となります。しかし、この言葉の本当の意味合いは、「世界中の人々は、みな、一人ひとり尊い」ということであると教えられています。

この「みな、一人ひとり尊い」という確信が根底にあつて初めて、「非暴力」、そして「全ての宗教を尊重すること」「真実を語ること」、さらには「全ての人を愛し、尊敬すること」も、現実のものとなると受け取るのであります。

バット女史が、永年にわたって進めてこられた活動には、こうした深い宗教性に裏づけられた限りない愛、慈悲が込められています。だからこそ百万を超える人々がメンバーとなり、今も発展を続けているのであります。

「SEWA（セワ）」の第二の特長は、貧しく、抑圧されている女性に対し、単に物や資金を援助するのではなく、精神的、経済的、社会的な「自立」を目指していることでもあります。

バット女史は、社会的に軽視されてきた女性たちを「自営の女性労働者」と肯定的に位置づけ、組織の名称にも記しておられます。単なる弱者ととらえるのではなく、一人ひとりの存在を、尊敬（リスペクト）しているのであります。

旧態依然とした社会状況の中で、女性の「自立」を実現することは、決して容易ではなかったと思います。労働組合の設立をはじめ、銀行事業、保健・保育、住宅、社会保障、農業開発——それらの実現は、気の遠くなるような長い道のりであったことでしょう。批判や中傷、いやがらせを受けることも少なくなかったと伺っています。

その中で、バット女史は、抑圧する側の人々を攻撃するのではなく、女性たちの精神的、経済的、社会的な「自立」によって、差別や抑圧を乗り越えようと力を尽くしてこられました。信じる道を一步一步進まれ、今や多くの国民、敵対していた人々からも理解や支持を得ておられます。そして、バット女史の試みは、世界各国から「自立への手本」と高く評価され、大きな注目を浴びているのであります。

さて、「SEWA（セワ）」の第三の特長ですが、これは、今後の世界のあり様を考える上でも、大変重要な視点であると受けとめております。

それは、平和な社会を形成する上で、女性こそが重要な役割を果たすという確信であります。

バット女史は、こう述べておられます。

「女性は、社会を構成する鍵となる存在です。女性こそが、家族の基盤を育て、安定した社会を築くために働きます。女性は、絆を強化し、創造する人であり、保護する人です。そして、世界に、建設的、創造的、持続可能な解決方法をもた

らすのです」と。

また、ガンディーも、次のような言葉を残されています。

「もし非暴力が、人類の守るべき教義であるならば、女性は、未来の創造者としての地位を確実に専有する」と。

現代社会のさまざまな課題は、その多くが、能率、生産性、合理性、自己主張、競争といった男性的な指向、いわゆる「父性」が原因になっていると分析する方がいます。

一方、優しさ、温かさ、思いやり、協調性、分かち合いなど、女性に具わった「母性」こそが、真に人を育て、平和な社会をつくる原点になると指摘するのであります。

もちろん、「父性」や「母性」は、単に性別の違いだけで特長づけられるものではなく、一人ひとりの内面に関わることです。また、能率、生産性、合理性などに象徴される「父性」も、一方的に否定されるべきものではなく、「父性」と「母性」の調和が重要であります。

しかし、これまでの歴史を振り返るとき、男性中心の社会、「父性」中心の価値観に偏り過ぎていたことは事実であります。

バット女史は、「女性が社会変革のリーダーにならないければならない」とおっしゃっています。

このお言葉は、インドだけでなく、世界各国の人々に貴重な示唆を与えるものであり、新たな時代を切り拓いていく上で、一つのキーワードになるのではないかと受けとめております。

このたび、バット女史に、「第二十七回庭野平和賞」をお贈りすることを通して、私は、インドの女性が置かれている状

況について、改めて知ることができました。それは、同時に、我々日本人の生き方を見つめ直す機会でもありました。

インドと日本を単純に比較することはできませんし、日本の中にも困難に直面している方がおられます。しかし、大半の日本人は、恵まれた環境におりながら、感謝どころか、逆に不平不満をつのらせ、自ら苦を生み出しているのが現実と申せましょう。

仏教の禅宗の教えに、「吾唯知足」（われ、ただ足るを知る）
（私は、ただ満足することを知っているだけだ）という言葉があります。我々もまた、真の意味での精神的、経済的、社会的な「自立」を目指していかなければならないと痛感しているところでもあります。

「SEWA（セワ）」が設立されて三十八年。バット女史は、まだ「道半ば」といわれます。今後も、後継者が続々と育成され、女性による平和な社会づくりのうねりが、さらに大きくなっていくことを願ってやみません。

本日の贈呈式を契機として、バット女史の願いと行動を、より多くの人々が共有することを期待し、またバット女史が一層ご活躍くださることを祈念して、挨拶と致します。

皆さま、ありがとうございました。